



一般演題（口頭発表）

O-27

在宅医療における薬剤師の役割～問題事例を通して～

株式会社地域保健企画 ふくしま薬局

○宮崎 亜紀

【はじめに】在宅訪問を行う薬剤師の役割は、残薬・服薬管理・服用する剤型に問題がないかなどの服薬支援を行うことである。しかし現実にはうまく支援を行えていないことがある。今回、度重なる問題事例が多数発覚し様々な対応を行ってきた。そこで、この間に訪問服薬指導を行った44名を対象に服薬に関する問題点を抽出し、今後の業務改善の提案を行っていく。

【対象・方法】男性13名、女性31名、平均年齢84歳の患者を対象に薬の管理・服薬状況、訪問時の問題点を抽出し、問題患者に対してどのように対応したかの調査を行った。

【結果】服薬状況に問題がない患者は10名であり、それ以外の患者はなんらかの問題点があった。その中でも残薬整理10名、粉薬が飲めない3名、服薬援助が必要が5名であった。問題点が抽出できたためこれをもとに、個々の患者に適した解決法を検討し実行した。特に残薬整理は、医療機関と相談しながら患者個々に適した管理方法を提案し実施した。

【まとめ】時間の経過とともに患者の病状の進行や認知機能が低下するため同じ服薬管理状況で大丈夫とは限らない。特に薬を自己管理している患者はどこまでしっかりと管理できているかの確認を行っていくことが大切である。薬剤師が薬に関して時間をかけて一人一人丁寧に介入することで、コンプライアンス向上につながり、適切な服用方法を検討できるメリットがある。今後も患者に寄り添いながら患者の生活リズムにあった飲み方などを検討し、医療機関と連携しながら在宅訪問を行ってていきたい。

O-28

成功・失敗例から学んだ在宅業務の見直し

株式会社地域保健企画 錦町薬局

○伊藤 優子、土野真奈美、金川 瞳、
尾股 洋子、伊藤 美夏、島野 清

【目的】当薬局は1997年の開局当初から在宅訪問服薬指導業務を実施し、現在は月60回の訪問指導を4人の薬剤師で担当している。最近の活動としては主に処方箋を応需しているクリニックと月1回在宅カンファレンスを行い医師・看護師と情報交換しているほか、ケアマネージャーとの連携、サマリー作成など訪問活動の充実を図っている。訪問業務を行うなか、多くを学びその都度業務改善を行ってきた。そのきっかけとなった事例について報告する。

【事例の概要】①重要事項説明書改定

薬局は薬の配達だけをしてくれれば良いという患者（家族）にバイタルチェックの介入を試みたが、余計なことをすると拒否反応を示された。初回説明時に訪問薬剤師が何をするのかについての説明が不十分であったことも要因と考えられ、説明文書の改定を行った。

②デスカンファレンス立ち上げ

60歳代前半と若く3割負担で高価な薬代が支払えないため当初疼痛緩和のオピオイドは薬価の低い塩酸モルヒネ水が主体だった。オピオイドの適正使用について医師に働きかけ家族とも深く関わる。主介護者への配慮と心遣いの必要性を学び死亡後グリーフケアに同席。デスカンファレンスを立ち上げるきっかけとなった。

【考察】薬剤師の役割は、医薬品の適正使用・医療安全の確保・患者の見守りであるが、必ずしも他職種や患者・家族に十分に理解されていないのが現実である。今回の事例では改めて初回訪問時のインフォームドコンセントの重要性を学んだ。また、患者が死亡した後のケアは薬剤師にもできることを学んだ。事例から学び立ち上げたデスカンファレンスを継続し、今後の訪問活動につなげて行くことを目指していきたい。



一般演題（ポスター）

P-03

在宅業務に対する患者・医療介護従事者への意識調査

（株）地域保健企画 多摩薬局

○坂本 洋美、高橋 伴典、手嶋 碧、
黒田 麻耶、石井不二子、佐々木敬子、
島野 清

【目的】2012年度よりケアマネージャーへの情報提供が始まったことから、薬剤師在宅業務の認知度と今後の課題を探るため、医療・介護従事者（以下従事者）と患者に対して、薬剤師訪問服薬指導に関する意識調査を行った。そのうえで、当薬局における在宅業務のあり方について検討した。

【方法】2013年3月に、薬剤師在宅業務の実施事項・患者満足度などについてアンケート調査を実施した。対象者は在宅業務に従事する11事業所67名（医師8名、看護師23名、ケアマネージャー15名、ヘルパー12名、他9名）、当薬局の在宅管理患者20名（年齢60～90代、家族含む）であった。

【結果】（1）薬剤師の介入により良かったと実感した例をあげた従事者は64.2%、患者は75%であった。本人・家族の負担軽減だけでなく、訪問看護師の服薬管理に割く時間の短縮が有意義であるとの意見も多かった。

（2）薬剤師の在宅業務に対する理解度は、従事者で82.1%であった。一方、薬剤師がバイタルサインチェックを行う意義については、従事者側からも患者からも疑問があげられた。

（3）情報提供書については、患者が他職種には伝えていない事が書かれている報告書は参考になるとの回答があった。一方でケアマネージャーからは、処方内容がわからないなどの意見もあげられた。

（4）患者満足度は5段階評価で平均4.31であったが、薬剤師の在宅業務に対する理解度は48.3%であった。

【考察】○薬剤管理指導を薬剤師が担うことが訪問看護師をはじめとする他職種の負担軽減にもつながっているとともに、薬剤師視点の情報提供が貴重なものとして受け止められていた。一方で、薬剤師が行うバイタルサインチェックのように、理解が不十分な部分もあった。薬剤師からアセスメント・情報の提供を活発に行い、薬剤師業務への理解をさらに深める取組みが必要であると考える。

○ケアマネージャー宛ての情報提供書は、処方内容が確認できるように工夫した。また、訪問看護師へも同様の情報提供書を送る他、地域ケア会議に出席して、多職種間の情報交換を実践している。さらに、訪問看護ステーションなどの勉強会を開催する予定である。

○患者の満足度は概ね高かったが、薬剤師の役割への理解が乏しい患者もいた。患者との相互理解を深め、訪問薬剤管理指導の意義が明確に伝わるように活動の幅を広げていくことが重要と考える。

P-16

外来高齢患者の在宅における服薬支援の取り組み

（株）地域保健企画 多摩薬局¹⁾、（株）地域保健企画²⁾

○黒田 麻耶¹⁾、高橋 伴典¹⁾、手嶋 碧¹⁾、
坂本 洋美¹⁾、石井不二子¹⁾、佐々木敬子¹⁾、
島野 清²⁾

【はじめに】高齢化に伴い、外来通院患者の薬の管理が困難になってきている。残薬の有無を尋ねると多数の薬が家に残っている、また用法用量の確認をすると返答があいまいであるなど、ノンコンプライアンスが疑われる例をしばしば経験する。そこで当薬局では、昨年より気になる患者に対して患者宅訪問を開始した。事例を通じて、外来患者での在宅訪問指導の有用性について検討したので報告する。

【事例】①80代女性 独居

家に電話なし 調剤時にお薬手帳を確認したところ、数日前に他薬局で同じ処方薬が出されていた。本人に確認したところ家に薬がないので新しく処方されたとのことだった。訪問したところ、煩雑な服薬管理をしていた。その後、服薬カレンダーを用いて渡薬。服薬状況が安定するまで、見守りという形で月1回程度の訪問を行った。

②80代女性 独居

近隣クリニックの看護師より服薬状況が心配と薬局介入の依頼あり。ケアマネージャーと共に自宅訪問した。服薬カレンダーを設置、ヘルパーの援助となり、服薬状況が改善できそうとのことで、薬剤師訪問は中止した。コンプライアンスは改善したがかえって下剤が効き過ぎてしまった。今後、用量変更などを医師に提案していきたい。

③82歳女性 息子夫婦と2世帯

朝夕の薬が2つ入っていると来局。確認したところ、先月渡薬した残薬が入っていた。自宅訪問し、ヘルパー介入があり服薬カレンダーセットしてもらっているが、残薬が多すぎる事が分かった。一旦残薬を預かり、必要分のみを渡薬した。

【今後の問題と課題】認知能力の低下で、薬局での聞き取りでは本当の服用実態がわからない事例が多いことを経験した。薬剤師が訪問することで、残薬があることが確認できたり、より適切な服用方法の提案が可能になることが確認できた。このような訪問指導は有用だが、訪問指導料が算定できず、サービスでの対応となっている。今後も有効な薬物療法のために可能な限り訪問指導を行っていき質の向上を図りたいと考える。